

# 公立図書館における蔵書点検実施状況と紛失率

松本直樹（慶應義塾大学）\* 小川万柚（元慶應義塾大学文学部）

\* matsumoton@keio.jp

## 抄録

蔵書点検の実施状況について、関東地方の1都6県の公立図書館を対象に調査を実施した。ランダムサンプリングにより146館を抽出し、質問紙を送付した。回答は111館からあった。調査の結果、すべての図書館で蔵書点検を実施していること、ICタグ・バーコードなど蔵書管理方式により処理件数が大きく異なること、紛失率は9割以上の図書館が0.2%以下であること、BDS設置は紛失率に僅かではあるが影響のあること、などが分かった。

## 1. 背景と目的

蔵書点検は、「蔵書全体を書架目録と照合し、蔵書の現状や紛失資料の有無を確認すること」<sup>1)</sup>である。多くの公立図書館では、蔵書点検のために定期的に図書館を閉館し、資料の点検をしている。蔵書点検を実施することで、資料を適切に管理することができ、利用者の資料要求に適切に応えることが可能になる。

蔵書点検については、大学図書館や病院図書館で事例紹介などが行われてきた。2023年には『看護と情報：日本看護図書館協会誌』<sup>2)</sup>で特集が組まれている。また、伊藤他<sup>3)</sup>は公共図書館を対象に蔵書点検の実施状況と紛失率についてアンケート調査を実施している。図書館の電算化が一般化する以前であるが、実施率は市立図書館で70.5%と低いことが分かる。

近年、ICタグ<sup>4)</sup>の活用やAI<sup>5)</sup>を活用した蔵書点検も普及してきた。また、盗難防止装置も多くの図書館で導入されている。こうした状況を踏まえて、本研究では公立図書館の蔵書点検の現状を明らかにする。特に、近年の蔵書点検で、①どのように蔵書点検が実施されているのか、また、②紛失率はどのようになっているのか、を明らかにすることを研究目的とする。

## 2. 調査方法

調査方法は質問紙調査を用いる。調査では、対象館に質問紙を送付し、ウェブフォームへの回答を依頼した。対象とした図書館は関東地方1都6県の公立図書館である。関東地方の図書館のうち、都道府県全館と、ランダムサンプリングで抽出した区市町村146自治体の図書館を

対象とした。抽出した自治体の中央館に調査を依頼した。回答は、中央館のみの情報とし、分館・地域館の情報は含まないよう依頼した。

質問紙は2023年10月に送付し回答期限は11月とした。調査事項は、①BDS設置の有無、②蔵書点検の実施の有無、③実施頻度、④対象資料の範囲、⑤読み取りの方法、⑥読み取りにかかる日数、⑦蔵書点検のための休館日数、⑧点検対象数、⑨蔵書点検の作業にあたる職員数、⑩不明資料数、⑪蔵書点検に関わる課題、⑫蔵書点検非実施館の理由、である。期限までに回答のあったのは111館であった（有効回答率76.0%）。質問項目は、詳細な情報開示の忌避が回収率を低下させないように、基本的に選択式とした。

## 3. 調査結果

以下では、研究目的の①②の順番に調査結果を述べていく。まず、①どのように蔵書点検が実施されているのか、について述べる。

蔵書点検の実施状況であるが、回答のあった111館すべてで蔵書点検を実施していることが分かった。伊藤の調査では、70.5%であったが、近年、大きく状況が変化していることが分かる。実施の頻度は1年に1回が99館（88.4%）で大多数であり、1年に2回が6館（5.4%）が続いた。蔵書点検で対象とする資料を尋ねたところ、「一部除外資料がある」が、61館（54.5%）で最も多く、「すべての資料」が51館（45.5%）であった。

実施方法について、バーコードやICタグなど複数の方法で実施していることが想定されたため、複数回答で回答を求めた。結果、1方法

のみが 74 館 (66.1%) と最も多かったが、2 つも 35 館 (31.3%) であった。このように、複数が一定数見られた。方法の詳細は、「バーコード (オフライン処理)」が 75 館 (67.0%) で最も多く、「バーコード (オンライン処理)」が 43 館 (38.4%) で続く。以下、IC タグ (HF 帯) 20 館 (17.9%), IC タグ (UHF 帯) 13 館 (11.6%) であった。従来型のバーコードが多数だが、IC タグ利用が増えている状況がうかがえた。

日数について述べる。作業日数は、3~4 日が 45 館 (40.2%) と最も多く 1~2 日が 23 館 (20.5%) で続く。一方、閉館日は 7~8 日が 31 館 (27.7%) で最も多く、5~6 日が 28 館 (25.0%) で続く。閉館日から作業日数を引いた値は 3 日が 40 館 (36.6%) と最も多かった。

日数は点検対象点数に依存する。その点検対象点数は、21~30 万点と 31~50 万点がともに 31 館 (27.7%) であった。それらを処理する人数について、最大従事人数を尋ねたところ、11 人~20 人と 21 人~30 人がともに 28 館 (25.0%) であった。これらの点検日数、対象点数、最大従事人数のそれぞれの選択肢の中間値を用いて、一人が 1 日で処理する点数を算出すると、1,000 点以上 2,000 点未満が 23 館 (20.5%), 4,000 点以上から 5,000 点未満が 21 館 (18.8%) であった。ばらつきが大きいのは、最大作業人数や概数で調査したことが関係していると考えられる。

一人が 1 日で処理する点数について、蔵書管理の方法ごとに算出した。ここでは、複数方法を用いている図書館を除外して算出した。結果、IC タグ (HF 帯) が 7717.2 点で最も多く、バーコード (オフライン処理) が 5348.8 点、IC タグ (UHF 帯) が 4858.7 点と続いた。IC タグ (UHF 帯) がバーコード (オフライン処理) よりも少なかった理由は不明である。

蔵書点検の課題について選択式で尋ねた。結果、「点検に時間がかかる」が 80 館 (71.4%) で最も多く、「一度に多くの人手が必要である」78 館 (69.6%)、「閉館しなければならない」71 館 (63.4%) と続く。「かかる労力に相応した効果が見られない」は 2 館 (1.8%) と少なかった。

つぎに、研究目的の②紛失率はどうになっているのか、について述べる。紛失点数は、

108 館から回答が得られた。点数では、0~100 点が 49 館 (45.8%), 101~300 点が 33 館 (30.8%), 301~500 点が 15 館 (14 %) であり、500 点以下の累積図書館数は 97 館 (90.7%) であった。点検対象点数について選択肢の中間値を分母に紛失率を算出すると、0.1%以下が 72.9%であり、0.2%以下は 93.5%であった。伊藤の研究と比較して大幅に紛失率が低下していることが分かる。

さらに、今回、盗難防止装置 (BDS) の有無を尋ねているが、設置状況と紛失率についても確認した。まず、設置状況であるが、設置している図書館は 54 館 (48.2%)、していない図書館は 52 館 (46.4%)、一部設置は 6 館 (5.4%) であった。このうち、設置している図書館の紛失率平均は 0.060%であり、設置していない図書館は 0.127%であった。また、一部設置は 0.088%であった。このデータから、盗難防止装置には一定の効果があることを確認できた。

#### 4. まとめ

本研究では、蔵書点検の実施状況と紛失率を調査した。本研究で明らかとなった重要な知見は、IC タグ・バーコードなど蔵書管理方式により処理可能件数が大きく異なること、紛失率は 9 割以上が 0.2%以下であること、BDS 設置は紛失率に僅かではあるが影響のあること、などである。

#### 【引用文献】

- 1) 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編. 図書館情報学用語辞典 (第 5 版). (2020). 丸善出版.
- 2) 特集 蔵書点検再考. (2023). 看護と情報: 日本看護図書館協会誌. 30(0), 9-43.
- 3) 伊藤昭治, 山本昭和. (1992). 本をどう選ぶか: 公立図書館の蔵書構成. 日本図書館研究会.
- 4) 後藤敏行. (2012). 図書館における RFID 業務の課題: 導入館への質問紙調査から. 図書館界, 64(3), 190-203.
- 5) 阿部崇宣. (2020). 船橋市図書館と京セラコミュニケーションシステム共同実証実験: AI 蔵書点検システムの実用化に向けて. 図書館雑誌, 114(8), 414-415.